

編集後記

8月7日愈々問題の臨時医業制度調査会と臨時診療報酬調査会が発足した。劈頭サムズ准将から「日本の医師は薬を売り、歯科医師は金を売って生活している。宜敷く改めて、病院を中心とした活動をして、それぞれ専門の知識・技能に基いた妥当な報酬を以て奉仕するようにならなければならない」というような趣旨の話があつた。

確に従来の診療報酬の立て方は、そういう解決が成立つ形式になつてゐる。この従来の慣行報酬から本来の技術の報酬を明にする為には、物に関する部分を差引かねばならない。こゝにも医療費の原価計算が浮び上つて来た。

本誌は、病院の使命に鑑み、その経営上の観点から適正医療費の算定問題を取上げ、各方面の注意を喚起して来たが、毎号次第に進歩発展し、本号あたりから愈々具体的な数字を把みうる段階になつて来た事は、医業分業問題を契機に診療報酬の革命を来さんとする現段階に当つて、時宜を得て来たものと信ずる。

そもそも診療報酬の基礎が漠然としていた事は、日本の医療制度が、開業医の個人企業の域を脱し切れず、公立病院に於てさえその影響を強く受けて居つたからで、大体医師の様な技術本位の面も不規則多忙な業態を企業的に取扱う事が困難なのであつて、工業原価計算が大工場から出発しているように、医療費原価計算は大病院から始めるべきである。然し乍ら、従来大病院でさえ、経営の合理性を把握出来なかつたので、やつと病院管理の問題から経営理論の研究に発展し、漸く近來原価計算の研究に入つた状態である。

サムズ准将の言による、医師は企業家から本来の技術家の姿に帰るとすれば、医療に必要な物即ち資本は次第に病院という非営利性の企業体に移つて行く可きで、その病院の資本を公共性のものとし、その資本を総ての医師が社会的義務をはた

すに都合がよい事になるものではなからうか。

病院の責任は益々重大となる。病院の発展の為に努力をしなければならない。

入院料及び高級手術料の公定診療費の値上げ問題は単なる病院の利益の為でなく、一般の医師の社会活動の為に、又国民の福祉の為に、真剣に取上げられねばなるまい。

本号には、橋本氏の診療費原価計算の立て方、結核予防会保生園の原価計算、岩田氏の病院給食費等非常に参考になる原稿が頂けた。各方面からどしどしこの方面の資料を提供されることを歓迎する。

本号には更に、人事院佐藤氏の職階制の解説、守屋氏の超勤手当、吉田の病院医師の問題等重要な人事管理の問題の検討があつた。

尙各病院での具体的ないろいろの御苦心を掲せさせて頂いているが、将来共お互に非常に御参考になることと思うので、読者欄の様な御気持ちでどしどし御投稿願いたい。

厚生省病院モデル設計の解説を次号には掲せたいと思つていますから御期待下さい。

本誌編集委員守屋東一管理部長は去月末渡米した。病院管理問題の権威者 MacEachern のもとで親しく研究することになつてゐる。アメリカからの便りは即刻本誌上にのせてゆく予定であるから御期待を。

なお次号には国立療養所村松晴嵐荘医務課長加納保之氏のアメリカだよりを掲載する。大いに示唆するところあると思う。

「病院」も2年目に入つて充実を示して来た。1病院1誌は今までの目標であつたが、本年は各医局でそれぞれ1誌をそなえるくらいの熱意と関心が、病院管理の諸問題をめぐつて盛上ることを期待する。(編者)